

第2回トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群研究機関会議 議事概要

開催日時 令和4年12月12日(月) 13:00-15:00

開催場所 web会議 (Microsoft Teams)

議事次第

開会

議事

1. トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の新たな資源評価に関する説明と検討
2. 外部有識者講評
3. その他

概略

トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の資源管理目標として、2002～2020年漁期の天然由来の加入量に対してあてはめられた対数正規分布に基づいて将来の加入を予測した、1Bルールに基づきF30%SPRをFmsyの代替値とした場合におけるMSY等管理基準値を提案した。併せて、同時に議論がなされてきたリッカー(RI)型およびホッケー・スティック(HS)型再生産関係に基づくMSY等管理基準値およびこれらを選択できなかった理由、また2023年漁期の漁獲量の減少を抑えるとともに以降の漁獲量の変動を抑える「変動緩和シナリオ」についても、簡易版をはじめとする各種資料に記載することで、これら資料の内容は承認された。

質疑概要

1. トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の新たな資源評価に関する説明と検討

(1) これまでの検討の概要、簡易版案および提案書案の説明

県水試等参画機関：先週の担当者会議では変動緩和シナリオの表について、表示を $\beta=0.7$ 、 0.8 、 0.9 でカテゴリー2以上を全て示すとのことだったのではないかと。

水産機構：どのシナリオでも10年に1回でも限界管理基準値を下回る確率が100%、漁獲量が半減する確率が0%であり、リスクに差がないということになる。この場合カテゴリー2と3が現在同義の状態になる。シナリオの違いによってどれだけリスクの回避能力に違いがあるのかをカテゴリー分けしているもので、これだとどの管理方策も限界管理基準値を下回るリスクが同等に高いという判断で全て同じカテゴリーになっている。この会議の判断の結果として、限界管理基準値を下回るか否かを重視するのであればこれで良いが、その中でもシナリオ間管理方策の差を確認したいということであれば、ある基準を下回ることをリスクとするのかでリスクの差を確認するのも必要なのではないかと。

水産機構：先週の担当者会議ではカテゴリー0、2、3が混在しており、ベースケースがカテ

ゴリー2であったことから、カテゴリ2と3であれば問題ない、との整理であった。その後、本日の研究機関会議までに精緻な計算をしてところ、先週カテゴリ2であったシナリオが全てカテゴリ3となった。カテゴリ0は推奨されない点は共通であり、本日示している表が最終的な結果である。

県水試等参画機関：将来予測図について、結局管理をした方が親魚量は増えるものの漁獲量は少なくなるということになる。また、図10種苗放流を想定した親魚量の将来予測をみると、現状の漁獲圧でも20年後の2040年にはSBmsyに到達することになっている。そのあたりもう一度説明をお願いしたい。管理をした方が漁獲量が増えないことの説明をしてほしい。

水産機構：基本的に目標とする親魚量が目標を達成することを重視すると図の赤線になる。漁獲量を重視するよりは親魚量の目標達成を重視した予測である。親魚量の目標を10年後に達成しなくても良いのかという部分は管理での議論になる。資源が目標を達成するか否を重視して研究機関として示している。

水産機構：10年後に目標を達成するとした $\beta=0.7$ で計算した場合の図となる。10年後目標が達成されている場合には β は1以上にすることも可能で、そういった10年後の選択はこの図には反映されていない。そうしたことも加味していただきたい。

県水試等参画機関：親魚量を目標としている点は理解するが、将来予測については漁業者に理解は得られないのではないかと考えている。

水産機構：まずは親魚量を目標としている点は理解していただければ。漁業者等への説明は丁寧にしてまいりたい。

県水試等参画機関：トラフグではヒラメと異なりMSY算定の際の加入の参照年と将来予測の加入の参照年が異なる。1Bでは参照年は同じとするのではないのか。

水産機構：トラフグでは将来の加入にバックワードリサンプリングを行っていて、将来の加入に低加入を想定している点はヒラメの直近5年平均と異ならない。トラフグでは親魚量を今よりも増やすといった点については資源量840トン为目标としてきたこれまでの管理も意識しており、目標をさらに高いところに置いている。今後数年についてはヒラメ同様低加入を想定し予測しているといった整理となる。

県水試等参画機関：トラフグは今までの目標値と併せて考えているということか。

水産機構：1Bルールで（加入参照年と将来予測に使用する年を）合わせるという決まりはない。トラフグは今までの管理の経緯もあり、現状の親魚量よりも高い目標としつつ、今後数年の加入については最近の低加入を反映した次第。

（2）研究機関会議資料案（変動緩和シナリオ部分）の説明

水産機構：上限下限ルールの図については重要だと思うので簡易版に載せてはどうか。変動

幅を抑えると将来予測における予測区間が広がる点は、表だけでは示せない。将来予測を 2060 年まで示すのではなく、より重視される直近の 10 年を示す等も検討してはどうか。

水産機構：確かに、将来の漁獲量の変動幅を抑える管理をしても逆に変動幅が大きくなる点は重要であり、直近 10 年を示す図を掲載するとともに、この点についてキャプションにも追記する。

2. 外部有識者講評

皆様お疲れ様でした。担当者会議も事前に行い、良い方向に向けて努力されていることは素晴らしいと思います。管理目標が定まったこと喜ばしいことである。ただし、これからの問題でどうやって漁獲していくべきか、またトラフグの資源をどう回復したらよいかを本格的に議論を進めていかないといけないと感じます。これからの皆さんの活動・提案等に期待します。

以 上